「総合的な学習の時間」に向け
—体験的・実践的学習を担う教科の立場から—

小林 京子・高橋美与子

新学習指導要領において、「総合的な学習の時間」が創設され、授業時間数が減少する中で、教科の枠を越え、横断的・総合的に学習を進める機能が設けられた。生徒たちに将来の自立した生き方を考えさせるためには、基礎的・基本的な知識理解と共に、実践行動に移せる体験学習を通して技術力や応用力を持うことの両輪とした教育をいくことが大切である。さらに、自然との共生、多くの人と生き支え合うよう、他への思いやりのある心豊かな優しい人間教育も大切である。

そこで、本報告では、今までの家庭科教育においての体験学習の実践例やさらに、課題学習レポートに対しても教科の教科教員のアドバイスをもらい、課題研究を多角的総合的に深化させる学習を目指した。一種のクロスカリキュラム的な試行を実践してみたのでその様子を報告する。

1. はじめに

2002年からスタートする完全学校週5日制のもとで、学校の授業時間数は減少する。そうした中、この度、文部省から告示された学習指導要領1)では、各教科教育の内容は、基礎的・基本的なものに厳選されたり、各学
校の創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開し、国際理解、情報、環境、福祉、健康など横断的・総合的な学習を実施するため「総合的な学習の時間」が創設された。この「総合的な学習の時間」において、⑴自ら
課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる。⑵学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体
的、創造的に取り組む態度を育て、自己のあり方生き方を考えることができるようする。このことを主眼におき、学習活動として、自然体験、社会体験（ボランティア活動、部活動）などの体験的な学習や問題解決的学習を積極的に取り入れることを提示している。

こうした全体的方針・目標のもとに、「家庭」の目標
としては、人間の健全な発達と生活の営みを総合的にと
らえ、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会とのかかわ
りについて理解させるとともに、生活に必要な知識と技
術を習得させ、男女が協力して家庭や地域の生活を創造
する能力と実践的態度を育むこととしている。

全体的目標で、課題として示してある福祉、健康、環境などは、特に領域としては設定していないが従来から家庭科の中心課題の一つとして取り扱っている。従って、私ともかく願っている児童生徒の将来に向けての人間形成の育成に大きな力添えとなり、一層自信を持ち
て日々の授業実践に打ち込む。

しかし、全体的にはすばらしい道しるべにもかかわら
ず、教育現場の実状は、個性重視言いつつも、やはり受験システムの影響を強く受け、親の力が子に対する期
待が大きいわけでも目先のことばかりに振り回され、さら
にそのことが生徒たちにも反映し、知識偏重となり、生
活経験の場及び機会を奪うこととなっている。さらに、そうした親や生徒の願いに応える教育内容に偏りがちである。

また、すでに報告されている他教科の総合学習の実践
例2)をみてみても、その多くが少ない時間の中で、考え方や
もの見方を養う場に留まりかが、具体的に生活の場
でどう行動するか、主体的行動、応用力を身につけるに至っていないようである。受験システムのみの弊
害ではないが、このような生活経験の希薄化は、さらに
多くの人とのかかわり、人間関係を損ない、自己本位
に陥りやすく、他を思いやる心優しい気持ちが欠如しやす
い。また、少子化で親の子に対する期待の大きさから
過保護な援助では失敗経験（失敗から学ぶことも大き
い）や時間を掛けてじっくりと考え学ぶことを避ける結
果となる。その上、生徒もそのことを当然のこととして受
め、感謝の気持ちも失われてしまいやすい。

文明社会の中で、インターネット通信や電子メール等
による映像や文字と対面した交流の手段も盛んになり、新
しい情報を見やすく入手できる利点もあるが、生の生
間と直接対面することは、こうした機器を使っては味わえ
ない心の力が互いに通じ合う捨てがたい交流である。今
日の児童生徒の考え方・生き方・行動において、社会的
に取り上げられているような問題が生じる一つの原因は、こうした家族を含め人との交流や生活経験の欠落がかかわっていると思う。

常日頃から、共に生き、共に支え合うことの大切さや「知識として知り、わかる」とこと「できて、わかる」こととは違うことを信条に据えて教育に携わっている者として、人との交流や生活経験に時間を掛けて取り扱う実技教科の重要性を改めて痛感する。

徒って、これからの教育において授業時間が減少する中で、教科の枠を越え、横断的・総合的に学習を進める機会が設けられたことは大きいに歓迎し、今後の教科の特性を生かし、積極的に参加したい。将来の自立した社会生活においては、基礎的知識と具体的行動実践が共に備わり、人とのコミュニケーションがはかれるのが大切である。是非、教育課程を組む際には、知識偏重になることなく、車の両輪のウェイトを持って決定してきたいものである。

そこで、この度の報告では、今まで実践してきたことで、先に発行された本校の報告書未掲載の実践例とそれに付加して、生徒の課題研究に他教科の教科担当のアドバイスを取り入れて再度生徒に還元し、課題研究を多角的に深化させた試みを報告する。

2. 新学習指導要領の目標と関連深い今までの実践例

以下の実践例は、既に本校の研究研究会や広島大学教育学部学部・附属共同研究体制の研究要及び家政教育と発行の「家庭科教育に課題研究」に報告しているので詳細は省略し、主な点を掲げるに留める。

（1）課題研究

高等学校での家庭科が男女共に学ぶ教科としてスタートした時（1994年度）から継続して実践している。1年生の当初、「家庭一般」の学習に当たって家庭科の学習の目的の提案と共に、視覚を広げ世の動向を知るために、情報源の1つである新聞記事のうち、家庭生活に関連が深く興味関心の高いものを1人3件選んで切り取り、記事として取り上げられた社会的背景や何か問題なのか、自分たちの生活との関わりはどう対処したらよいかなど自分の意見及び感想をまとめた課題を提示する。平素、新聞はテレビ番組やスポーツ欄以外は目を通すことの少ない生徒が、家庭課を中心に読み、自分なりの受け止めや記載者の考えを読み取る作業を通してまとめ、さらに発展させ、表1に示す課題研究テーマ領域のうち、個の興味関心に応じていかつか定め、同じテーマ毎にグループを形成し、個人の課題研究のまとめと同様なことを同年齢の友人と意見交換しながら模造紙にまとめまる（写真1）。まとめた模造紙は教室に掲示し、その領域の学習をするとき、取り上げて活用すると共に、他学年の生徒も読むことができるし、校内行事の学友祭でも展示発表し、多くの一般の人にも読んでもらう機会を設けていく。

表1 課題研究テーマ領域

| a. 家族のあり方について |
| b. 男女の役割分担・格差について |
| c. 食生活について |
| d. 衣生活について |
| e. 住生活について |
| f. 環境問題に関して |
| g. 保育に関して |
| h. 高齢者の問題について |
| i. その他 |

こうした課題研究は、教師の考えを押し付けることなく、しかも日常友人との会話では取り上げないことを友人と意見交換するために、伸び伸びとした雰囲気のうち、世の動向や自分たちとのかかわりについて考え、互いの行動実践への励みとしている。

（2）交流研修

①乳幼児とのふれあい体験

今日は、合計特殊出生数が1、4未満と低下し、兄弟、姉妹は少なく、高校生が家庭内に乳幼児を授ける機会や親が乳幼児を保育している様子を見る機会はほとんどない状況にある。従って、乳幼児の心の発達の特徴やどのようにかかわったらよりかかわらない、多感な思いずれに乳幼児に接し、特徴やかかわり方を経験することで生命の大切さや、愛の気持ちを抱き、将来親（大人）としてどうあるか望ましいか考え
を育成できる。このことを願って、高校２年生の保育領域の学習時に学校の近くの保育所（０～５歳児を入所）に出向き交流体験をする。まず、子どもの発達段階に応じて特徴を観察し、発達段階に適するおもちゃを作り、再び出向いて自分の子供の手作りのおもちゃを使って一緒に遊び、交流をする。幸いにも保育所側にもとても、乳幼児が高校生の兄妹に接する機会がほとんどないので喜んで受け入れに応じて下さっている。

僅か２度の交流体験であるが、交流後の生徒の様子は生き生きとし（写真２）、慣れない様子の中にも乳幼児の気持ちを大切にしている。市販品だけでなく身近な材料を活用してのおもちゃ作りでは、乳幼児が気に入って楽しく遊んでくれることを願って、グループで色々アイディアを出し合っている（写真３）。こうした、身近にある材料でおもちゃを作ることは、将来親（大人）になった時、子どもと一緒に作ることの意義もわかってくることであろう。

表２ 高齢者との対話から

写真２

写真３

②高齢者との交流

ー 高齢者との対話

１）高齢者との対話

毎年、高校１年生の夏休みに「高齢者との対話」に取り組んでいる。核家族で、高齢者と一緒に暮らしていない生徒はもちろんのこと、平素一緒に生活している生徒でも、生活時間のすれや自分のことで精一杯で、膝を交えてじっくりと祖父母の昔の生活（衣・食・住・行・遊・その他色んな話題）について話すことは少ない状況である。そして、高齢者に対して多くの方が「暗い、口うるさい、頑固」などとイメージし、自分たちとは話が合わないと決め、受け入れる姿勢が弱い傾向にある。しかし、実際に顔を合わせ、昔を懐かしく、身振り手振りを交えてとてもうまくうそに話してくださる様子に、先のイメージは崩れ、昔の生活の変化を驚くとともに自分たちの贅沢さに気づいている。さらに交流の大きな成果は、高齢者の人たちは、自分たち（孫）と話し合うことに大きな喜びを味わおうとしておられる様子に感激し、今後積極的に行い続けていきたい姿勢が起きていることである。また、対話を通じて高齢者との生き方に触れ、高齢者の理解と共に、自分自身の高齢期に向けての生き方を考えるきっかけとなっていた（表－２）。

２）伝統文化的承継

高齢者の生活は、今日のように家事労働の機械化・電化や社会文化が進んでおらず、体を使い、自然界の現象や思いを大切に活用しての生活であり、工夫や理解力にかかわる知恵が多く生かされている。そこで、高齢者との対話を通じて技術や知恵の伝授をもう少しすることを試みた。

＜伝統食作り＞

中学校３年生の夏休みに、家事の手伝いや家族とのコミュニケーションを兼ねて、地域の伝統食やお茶料理について調べ、よく用いられる食材のいれを求めるため、代表的な料理をつくってみることを試みた（表－３）。

ー 59ー
高等学校1年生では、先の対話から生活の中に行事を大切にした料理。「ハレ」と「ケ」の節目があることを学んでいる。今日では生活の節目に係わるいくつでも必要に応じて入手できるものが多く、たええお昼にはどんなことに関係があるのか知れないことが多い。そこで、比較的馴染みの深い「おはぎ」作りを高齢者の人に学校に招いて共に作り、技術や知恵の伝授をしてもらった（写真4）。また、添えがかった「おはぎ」を一緒に食べながら名前の由来を聞いたり、その他の話題も含め交流を深めた（写真5）。生徒たちは、改めて高齢者の人の経験の豊かさや手際の良さと同時に物知りであることに驚いている。そしてこの経験を意義深く感じていた（表-4）。こうした交流は継続したいが校内での協力体制を得るまでには時間を要する。これからの「総合的な学習の時間」には是非実施したいものである。

写真4

写真5

表-4　生徒の感想

今では、自分があらゆる味に触れていかんかわって入学し、今日宿題をやっていて、ヤッカリ食事の
味付けの体験を大好きでした（表4）。

交流の楽しこた。それと食文化を経験してもらった。パリッシュ中止にしてはお流れと図を見て、家庭食の中で
積極的に学ぶと思う。

＜浴衣の製作＞

現代の生徒たちは、着物の着用には憧れを持っている。平素着用しやすくしかも比較的製作が容易なものに浴衣
ある。和服の製作者が今日少なく、親に尋ねても分か
らない家庭も多いが、高齢者の人の中には比較的多く
の人が製作技術を持っておられる。自分で着用する浴衣を
作ってみたいと意気込む生徒が数人いる。そこで、高校
2年のホームプロジェクトの1つとして祖母からの伝授
で製作に取り組み、出来上がった喜び・感動は隠せず。
作品と共に着用した写真（写真6）を持参して披露して
いる。

書き6
製作する過程で、色々工夫がされている知恵の伝授も
受けており、その理にかかったやり方にも驚かされている。
自分の体で覚えた理屈、知恵なので、きっと今後多
方面にも応用が利くことであろう。

（3）ボランティア活動

高校2年生の夏休みに、ホームプロジェクトに代えて
の問題解決学習の一環として、積極的な希望者はボラン
ティア活動のチャンスを与えている。平素では経験し難
い特別養護老人ホームでの介護経験を通してみたいと申し
出る生徒に、その施設を紹介している。2学期になって
各自取り組んだ問題解決学習の様子を発表する場を設定
し、互いにその成果を分かり合い、各自の生活に受け入れ
られることが積極的に取り入れ、生活の改善向上に役
立てる。ボランティア活動をした者も体験の様子を発表
し、他の生徒は、同年齢の仲間の経験ということもあり
真剣に耳を傾けて聞くなり、その発表をもとに間接的体験
する事で人間の理解を深めている（表-5）。

表-5 特別養護老人ホームでの体験

特别養護老人ホームでの体験の記録及び感想（要約）

Aさん

高校生同士で特別養護老人ホームの場で、介護の実践体験をしてみ
たいと思い、夏休みを利用して、特別養護老人ホームへ3日間実習に行く
ことにした。

高校生の家庭で見られてきたような介護が、初めて自分の身を
持って体験できたと思う。特に感じたのは、人手が足りないことと、公的
なサービスがまだまだ不十分ではないかということである。これは自分が
新聞などを調べて見渡して感じた。

Bさん

福祉に関する言葉がある。ボランティア活動というものを一度
はしてみたいと思っていたが、中学生の時は経験できなかったので、
ホームプロジェクトの機会を利用してやってみようということになった。
また、老人ホームに足を踏み入れたのは、今、高齢化問題になっている中で、時
間などから得る知識や経験だけではなく、実際に自分で体験してみて、次の
一步に問題を捉えるのだろうかということを少しでも少なかかることが出来たら
よいと考えたからだ。

今日、緊張しながら、薬局でお年寄りに薬を下ろし、話をかたした。ほとん
どが興味が、まだ知らない、無反応に思われた。薬局さんも印象的で、私
たちの挨拶に嬉しそうで、明るく元気な人たちでうれしかった。
薬局長さんの説明をしっかり聞いてから、介護に入れた。お部屋、食堂はお年
寄りでいっぱいだった。食事は隣にいた。慌てず、おうおう。
お手伝いが、さっさとお手伝いをしてくれていてくれた。負け、私は、
食べ取りにいくその食事に、とっておきをほぼおばあちゃんの口へと入れてい
る。あたたかだ。おお、おおくらい、おおお。
おきにしているのは手で食べられるからなのか。困っていたが、他に
おばあちゃんが、さっさとお手伝いをしてくれていてくれた。しかし、私は、
食べ取りにいくその食事に、とっておきをほぼおばあちゃんの口へと入れてい
る。あたたかだ。おお、おおくらい、おおお。

そのおばあちゃんの思い出は尽くない。おおありに入れる前に私が呼ぶ,
私の手のとれて手を書き始めた。とても感動した。その時に覚えた,
初めての手のとれて手を書き始めた。とても感動した。その時に覚えた,
初めての手のとれて手を書き始めた。とても感動した。その時に覚えた,
初めての手のとれて手を書き始めた。とても感動した。その時に覚えた,
発表を聞いた他の生徒の感想

I 高齢者について
・お年寄りや子供はべれべれじゃないぶりーニープ。私たちの思っていることがストレートに伝わる。
・子供は扱うのと別に意味でとても大変だと思った。
・70歳代の人は生活が大変である。
・70歳代の人は苦情が多いが、80歳の人は落ち着いているのが興味深い。

II 特別養護老人ホームの大変な仕事について
・老人ホームで働くのは大変。しかしこれからは老人ホームは足りなくなろう。
・頭で考えているとそこが世話をするのは全然違う。考えている以上に大変だったであろう。
・よくやった。
・病院でも大変ということだから、一日中老人ホームで働いている人は肉体的・精神的に大変だろう。
・老人福祉の大変さを感じた。

III 介護実習の意義について
・「してくれる」という言葉はニュアンスが違うと思う。ボランティアというものは貧弱に出るようになっているが一体どれだけの人が本当のボランティアをしているのだろうか。
・介護してくれる。あげたわけではない介護させて貰ったと考えていたのに。そうなった後の成長しないのではないか。試してもあけると思うことそれはただ差別である。でもそんなことはないということだった。
・このような発表では音楽選びが気になる。「してあげる」か「手伝う」か、微妙なニュアンスが違ってくるのでとても気になる。でも、実験体験が少ないので何ともいえない。
・福祉は難しい。

IV 社会福祉の今後の課題について
・男性の福祉への参加という点に共感した。しかし実際には、極端大変なことである。
・ボランティアの重要性を感じた。
・これから何が大事になっているだろう。
・老人ホームで働く人が、多く必要になって来るであろう。
・施設、設備、人手、労働条件など改善点が目立つある。
・これからは老人ホームは足りなくなるだろう。
・専門の人がいないと大変である。
・介護は家族が一番であるけれど、出来ないこともある。心を込めてするの一番である。
・ひとり歩きでなくては。
・私もおじいさんおばさんを大切にしよう。
・10代の私たちがもっと身上を考えなければ。
・自分が祖父母にさせてあげなければ。

V 体験の意義について
・二人はいい体験をした。
・老人ホームでの介護を経験してみたかったが、経験できなくて残念だった。
・以前学校で老人ホームへ行った時、喜んでくださった笑顔が今でも心に残っている。こういった経験は一堂に会するべきである。
・楽なことをやり過ぎただけで良かった。
・二人の経験は一生なのだ。
・体験がなかったことが新鮮だった。口では何ともいえないが、体験しないと本当のことは分からない。
・実際体験がないと分からない。
・もっと深く様々な問題を深く感じた。実際の問題は考えていたことの比ではないか。

(3) 環境教育
家庭科教育においては、すでに十数年前から生活に直接した問題として、自然との共存共存の視点に立ち、地球に優しい行動について考え、自分たちにできる小さな一步からの実践に取り組んでいる。例えば、合成洗剤の生活排水による河川の汚染、CO2の発生に伴うオゾン層破壊や地球の温暖化、海面の上昇、さらに付随して土地の浸水、有限資源の枯渇問題、ゴミ増加と埋め立て地不足等々の問題に対処する実践活動である。

１）プリンセッケン作り
毎年中学3年生を中心に、年に1～2回作り、調理実習で多量に生じる油の後処理の問題解決、河川汚染に比較的優しいせっけんの使用、洗剤購入経費の節約、さらに、希望生徒には家庭へ持ち帰らせることで家族への普及活動につなげることができる（写真7）。（表-6）
表-6 プリンせっけんを使っての感想

海と緑とを見ずに、合成洗剤で川と洗うため感がなく、\( \cdots \) までもしないと感じたようだ。

確かに、今度はあまり多くはなく、\( \cdots \) 使いかけたことも、\( \cdots \) 使いかけたことも。

海剋力も使ったで、\( \cdots \) 使いかけたことも、\( \cdots \) 使いかけたことも。

水がよく飲みこまれた。

(4) 生活講座

毎年、家庭科教育の1つとして、高校1年生を対象
に外部講師（小児科医や弁護士）を招き、専門的立場
から法にかかわる今日の問題や青少年期における望ま
しい食習慣についての講義を聴かせ、若者の慢やら
すい商品取引にかかわるトラブルについて、具体的事
例を取り上げながら対処の仕方を聞く機会を設けてい
る。専門的立場からの講義で、生徒たちは興味深く耳
を傾け、日頃の生活や今後の生活に思い出して生かす
ものと思う。

以上のように、家庭科教育では、知識として「知り
わかる」段階からさらに進んで、小さな一歩ではあるが
自らの体験を通じて、心の内に接し、肌に触れ、手
を動かし、実践として身につけていく実践活動をしてい
る。青少年時代のこうした体験は、将来の道選択
で未だ柔軟に対応できるときに、自らの生き方を模索
できるとても良いチャンスにもなるものである。

3. 「総合的な学びの時間」に向けた試案としての実践例

(1) 実践の方法

この試案は、先述した高校1年生の当時に実践してい
る課題研究に対して、研究内容によって関連の深い
教科担当の先生にもレポートを目に通してもらい、そ
の教科の立場からアドバイスをしてもらい、そのアド
バイスをもとに、レポート内容を見直し深化させる。
つまり、ひとりの生徒が課題研究に取り組み、まとめ
ていく過程は

①興味関心のある内容の課題研究に取り組む
②関連の深い教科担任のアドバイスを受ける
③そのアドバイスをもとに内容を多角的に見直す

こうすることによって、1つのテーマ内容を多角
的にかつ総合的に自分との知識理解として把握できる
のではないかと思うからである。

提出されたレポートの内容のうち、この度は、次
の教科担任の先生にお願いしてアドバイスをいただい
た。

a. 環境問題に関するもの（ダイオキシンや環境
ホルモンについて） --- 理科教育担当者
b. 環境問題に関するもの（シックハウス症候群
対策への取り組みについて） --- 社会科教育担
当者
c. 男女の役割分担に関するもの（男女差別や男
女雇用機会均等法について） --- 社会科教育担
当者
d. 男女の役割分担に関するもの（スポーツの
女性進出について） --- 保健体育科教育担当者
境教育に関するもの（環境ホルモン）のレポートについての例を提示する。
(2) 実践例
1）課題研究レポート例（表-7）
以下に、比較的多くの者が取り組んでいた環
表-7 レポート例
（環境ホルモンについて）
2）教科担当者のアドバイス例
教科担当者のアドバイス例は、同チーム研究者に
相手に一括のものである（表-8）。
表-8 環境ホルモンのまとめを読んで
○○さんが参考にされた立花・隆の「環境ホルモン入門」（新潮社）は、東京大学教授
学部の立花隆ゼミの学生が、インターネットや色々な文献を活用して調べたものを一冊の
本にまとめたものである。最初の動機は、極めて単純なところであった。その意味
においても、皆さんに最後まで是非完読してほしい書物である。内容的には5年生で学習
する生物Ⅰの知識が必要であるが、多少理解できなくても書物から読み出されている熱意が
感じとれると思う。また、環境ホルモン特にダイオキシンについて比較的読みやすい形で
まとめられているのが、酒井伸一の「ゴミと化学物質」（岩波新書）がある。ダイオキシンの
発生メカニズムや毒性および将来的なクリーン・サイクル・コンテロール戦略まで、幅広
く述べられている。
当校では、1998年4月より「ゴミ処理新システム」を導入し、ゴミの分別収集を実践
している。分別されたゴミ類のうち、缶類や瓶類および古紙・ダンボール類は、リサイク
ルに回されている。ダイオキシンの発生の原因となるといわれているプラスチック類は、
紙類と分けるようになっている。さて、皆さんはどうされているでしょうか。日常生活の
儀礼に流れていないでしょうか。このようにまとめをされることも大事なことですが、
まとめたあと自分の生活を省みることがもっと大事ではないでしょうか。皆さんがまとめ
られた文章を読んでみると、「身近にできることを実行する」とある。まさにその通りだ
と思う。現在の私たち一人ひとりができる限界は限られていて小さいかもしれないか
も知れない。しかし、学校生活や日常生活の中には、環境問題について取り組むことがで
きることは以外と沢山あるように思う。是非それを自分で見つけて1つでも実践してほし
い。
3）再提出レポート例

家庭教員教育の立場の他に、理科担当教科の先生からのアドバイスをもとに、再度認識を新たにしたり、社会的問題視されるニュースに過敏に反応する姿勢や自己に実践可能なことの整理をしている（表－9）。

表－9 再提出レポート例

4．今後への課題

はじめに提示したように、生徒たちに将来の生き方を考えさせるためには、基礎的・基本的な知識を深め、実践行動に移せる体験学習を通じて技術力や応用力を培うことを車の両輪としての学校教育であるべきだ。そして、さらに、自然を含めて他思いやる優しい心を持つ人間教育を目指したものです。

この度は、個人的な依頼によって他教科の先生にアドバイスをしていただく方法であったが、新しい「総合的な学習の時間」の実践に当たっては、クロスカリキュラムを取り入れられるような組織作りを提案したい。そして、各教科が横断的にその特性を生かし、さらに、生徒には多角的・総合的に捉えているように、まず、教師の共通理解を希望する。

最後になりましたが、今回の取り組みを実践するに当たって、お忙しい中ご協力して下さった各教科の先生方に深謝いたします。

参考文献

1）文部省 高等学校学習指導要領 大蔵省印刷局
平成11年3月

2）広島大学附属福山中高等学校 「総合的な学習の実践と考察－総合的な学習実践事例集－」
1999年 8月

3）岡本祐子・福田公子・小林京子・三宅美与子
西 敦子 「高齢化社会に関する家庭科授業の実践
的学習の効果。
4）小林京子・高橋美与子
「乳幼児とのふれあい体験
学習の成果－非体験学習者の比較から－」
広島大学附属福山中・高等学校 中等教育研究紀要
第37巻 1997
5）小林京子・高橋美与子
「伝統的な食生活（食文化の
経験）—高齢者との交流体験から－」
広島大学附属福山中・高等学校 中等教育研究紀要
第39巻 1999
6）福田公子・佐藤一雄・平田道恵・木下瑞穂・小林京子
「家族・家庭生活の価値観の形成
に関する授業の効果（II）—高齢者が調理実習授
業に参加した事例－－」
広島大学教育学部附属
研究紀要 第27号 1999.3
7）岡本祐子・福田公子・小林京子・三宅美与子
「高齢の家庭に関する授業（II）
家庭の実践的研究—高齢者の教育にみられる
福祉的教育と共感の理解－－」
広島大学教育学部
研究紀要 第22号 1998
8）小林京子「家庭科教育における消費者教育（第2
報）—実践的（生活領域における試み）－－」
広島大学附属福山中・高等学校 中等教育研究紀要
第31巻 1991
9）小林京子「過大包装問題についての授業」家庭科
教育 68巻 14号 1994 家政教育社
10）大沢仁久・小林京子
「自主・自立をめざす家庭科
授業－「生活講座」の実施－－」
広島大学附属福山中・高等学校 中等教育研究紀要
第29巻 1989